

やまなし

## 医療最前線

県立中央病院から

《 125 》



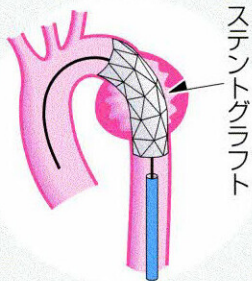
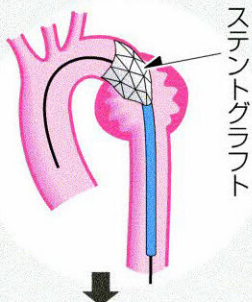
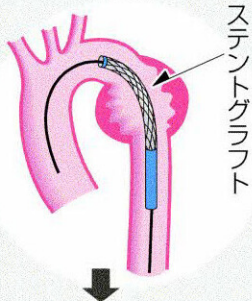
山田有希子  
心臓血管外科医長

県立中央病院は4月、内科と外科が連携して総合的な心疾患治療に当たるため、循環器病センターを開設した。高齢化に伴い、近年、80歳を超える高齢者でも心臓病の手術を受ける例が増加している。センター化することで、さまざまな合併症を抱える高齢者の術前・術後をチーム医療でフォローし、より安全な手術体制を整える。

心臓血管外科医長の山田有希

## 高齢の心臓手術に対応

### 下行大動脈瘤に対する ステントグラフト内挿術



子医師によると、心臓病の手術には主に狭心症・心筋梗塞による冠動脈バイパス術や弁膜症の手術、大動脈の手術がある。同病院は、これらの人工心肺を使用して行う開心術を昨年174件行い、このうち80歳以上の高齢者が45件と4分の1を占めた。2015年は開心術が155件（うち80歳以上26件）、14年は158件（同42件）だった。

心臓病の手術は体への負担が大きいため、高齢の場合、積極的に選はないことが多かったという。だが近年、従来より負担の少ない手術法や術後の回復を助けるリハビリの進歩によって、多くの高齢者が手術を選択している。

大動脈瘤の治療ではカテーテルによるステントグラフト手術も普及。同病院では経験豊富な外部医師の指導の下、昨年の胸部・腹部大動脈瘤のステントグラフト実施件数は29件（胸部13件）と前年（12件、胸部7件）と比べ増加した。センター化に伴い、施設整備と医師の育成も進めている。

「高齢者は高血圧や糖尿病、腎機能低下、脳梗塞のリスクなど多くの合併症を抱えるため、より総合的に診る必要がある」と山田医師。心臓血管外科、循環器内科をはじめ各科と手術部が週1回、合同カンファレンスを開いて情報を共有し、万全な体制で手術と術前・術後の管理に力を注ぐ。

山田医師は「手術の適応は年齢ではなく、患者さんの全身状態を診て決める。高齢でも手術の質を向上できる。内科と強く連携し、積極的に手術を行ってほしい」と話している。

Ⅱ第2、4木曜日に掲載します